

我慢の一時の長かったこと。

敵機の掃射も怖い、飢餓もつらい、孤島に置き去りにされた哀れな兵士の日々であった。

終戦、自活

昭和二十年十二月のある日、日本兵らしき者が現れて、「日本兵はおらんか」と呼びかける。皆で相談の結果一人を選抜して兵に恐る恐る近接し面談の結果、彼は終戦を伝える搜索隊の兵であった。東北訛りの兵であったらしい。

島の海軍部隊の本部があったハルマヘラ島カウに集結したが、各地から各島から続々と集まって来る兵士で「カウ」は急激に人員が増え、食糧難へと陥る。対策としてジャングルを切り拓いて開墾が始まる。

五十人くらいが一列横隊に並んで、各自ドラム缶で作ったスコップで掘り返しながら後退する。元氣な者と、マラリアや栄養失調で弱った者と、大きな差が出てきた。隣で働いていた兵が、予告なしに朽ち木が倒れるように突然バタッと倒れる、驚いて抱くと小さな呻くような声で「オカアサーン」と一言で息を引き取っ

た。毎日のように一人二人と死者が出る。

開墾地は十三町歩に及んだ。どこから入手したか芋蔓が植えられ、四カ月後には甘蔗で自活する。明るい見通しがついたのであったがつらい毎日の作業であった。

海軍陸戦隊では生還者一五〇名、死亡者一〇名であった。

昭和二十一年六月五日、夢のような生還の日を迎えました。

釜山牧之島沖海空戦

身代わり「三曳」乗船

全英靈に捧ぐ

長崎県 酒井敏郎

私は昭和二年生まれですから戦争参加者では一番若いと思います。現在の中学三年の時に海軍に入ったのですから。昭和十七年三月に高等科を卒業した時は海

軍志願の試験に合格してたのです。昭和十六年十二月二十五日に長崎の公会堂で海軍志願兵の採用試験があって、翌十七年二月に合格通知がきて、九月一日に佐世保第二海兵団に入団するようになっていました。

父が三菱造船所の庶務課に勤めていまして、卒業から入団まで、半年近くあるから三菱に入っておれと言われたものですから、造船所青年学校の造機設計部の採用試験を受けたら合格しまして、四月一日から八月二十八日まで勤めていました。

入団の期日も迫りました八月二十五日ころ、退職を申し出ましたところ造船所の保安課から文句が出たのです。

入社時に海軍に採用済みだったことをなぜ言わなかったのか、と。三菱は軍需工場だから兵役志願の取消しのできたのに……と散々説教されました。私は入社時に、その事は確かに申し出ていたのです。水掛け論になったのですが既に入団が間近になっていましたし、兵隊の方が先だったのです。

日の丸の寄せ書きや餞別も用意してくれた。設計部

の人たちは……。恐らく連絡もれだったのだと思いましたが。保安係は「そんな事聞いておらん」と怒っていました。

三菱では、青年学校に入りました。造船所の昔の職工学校の延長が青年学校でして、学科も普通学科と専門学科とあり、教練は一時間ある程度でした。学科と実地が優先でした。教練は二の次でした。

私は第二十五分隊の第七教班でしたから、一教班は十五人くらいですが全部で何人いたか分かりません。志願兵だけの班でした。入団して、法令改正で二カ月後に二階級特進で二等水兵になりました。昔は五等水兵があったそうです。

海兵団の教育は精神棒で尻を叩かれました。理由が分からぬのに叩かれるのです。太い棒は意外に痛くないのですが、細い方が痛いのです。特に痛かったのはストッパーと言われたロープを水につけたやつでやられると、体に巻きつきますから余計に痛かったです。

班長は滅多に叩かないのですが、短艇競争で他班に負けたら大変でした。食事の用意が終わって、いざ食

べようとしたテーブルを引っくり返して食べさせないのです。そのまま教練の継続ですから腹が減って、ふらふらでした。班長は外出して食事するのですから、ひどかった。

巡検後、寝てるところを叩き起こされて制裁を加えられました。入団して一年半くらいたって水兵長になると今度は自分が叩く立場になるが、それまでは叩かれることを覚悟せねばなりませんでした。

三カ月の海兵団の教育がやっと終わって、十一月三十日に海軍機雷学校に入校しました。

私の場合は志願兵の願書を昭和十六年の末に出しましたが、そのときに自分の希望する術科を第一志望・電信、第二志望・水測、第三志望なしと書いて出していたんです。学校に入らない者も中にはいたかもしれないが、学校へ行っていないと後の進級に影響があるのではほとんどの人が学校に入るのです。私は第一志望の電信が駄目で第二志望の水測を学ぶため機雷学校に入ったのです。

七カ月間、水測の教育を受けて卒業するという時に

第二種症で入院したのです。第二種症とは戦地で病氣にかかると第一種症です。いわゆる戦病ですが、第二種症は平病です。私は肋膜炎でした。第三種症は性病です。海軍は寝台がなく、ハンモックですが、慣れると割と楽なんです。偉い人になると肩のところに板を横に入れて広げておりましたが、下級の者は当然そんなことできません。

昭和十八年六月末に横須賀海軍病院に入院して二カ月治療して八月十四日全治退院、二十一日佐世保に帰ったら第一海兵団に転属になっていました。

十二月末に朝鮮の鎮海防備隊付きを命ぜられ朝鮮の釜山に行きました。防備隊はどんな仕事かと申しますと、釜山付近の島に駐屯して機雷を敷設して敵の侵入を防ぐのが任務です。私が扱った九二式機雷は楕円形で二メートルの大きさです。六個の機雷を電線で繋ぎ水面下十五メートルくらいに沈め、航路や港の入口に設定し、機雷設置されてある聴音器を絶えず聞きながら監視を続け、異状音を感知したときはスイッチを押して機雷を爆破し、敵潜、敵艦の侵入を防止するので

す。九二式の他に触角の付いた機雷もありました。

昭和十九年五月一日付けで待望の水兵長となり叩かれることもなくなりました。十月十日に敷設特務艇『黒島』（五百トン）乗組員を命ぜられ艦船勤務になりました。

昭和二十年五月一日に海軍二等兵曹（伍長）に任官しました。二週間後に初任下士官特別教育を受けるため、鎮海海兵団に仮入団し、初年兵に逆戻りさせられ、厳しい訓練を受けました。わずか半月の教育でしたが初心に戻らされました。

濟州島に機雷一五〇個敷設したことがあります。幸い敵機が来なくて助かりました。機雷敷設中に空襲や敵潜にやられたら機雷が爆発して木っ端微塵です。命がけです。上の人は「大したことないよ。火花がチロチロするくらいだよ」と軽く言っていました。

昭和二十年八月初旬、鎮海警備府司令長官（山口儀三郎海軍中将）より防備隊司令（宮木定知海軍大佐）へ命令、「貴官は黒島を司令艇とし外艦船六隻（海防艦二隻、敷設艇二隻、外二隻）にて八月六日より釜山

く対馬、対馬く博多間に海底電信線を敷設せよ」との命令を受けました。

八月五日朝、黒島艇長（小野誠海軍大尉）は防備隊司令より呼び出しを受け前記作戦命令を受けたが、司令を前に小野大尉は「死は少しも恐れるものではないが、この作戦はライオンの口の中の餌を拾うに等しく、電線敷設は現在の戦況においては身動きできぬ艦艇を毎日来襲する敵機のおよき獲物を供するに過ぎない」とテールを叩いて反論したが、「軍命令である」との強い司令の言葉に逆らえず、やむなく帰艇しました。

宮本司令は「六日は『黒島』へ乗艇できぬので『黒島』は五日夕、出港し、牧の島沖で艦艇と合流し待機せよ」と命じました。

昨今は戦況も悪く、毎日敵機が来襲し敵潜の出没も甚だしく、頼みの友軍機は影もなく、その状況の中の電線敷設作戦は、艇長言明のごとく必至の作戦であることは明白でした。艇長は帰艇後全員を集め前記作戦のため、「今夕出動する。貴様たちの命は艇長にくれ。今から出港準備にかかれ」と号令され、皆はそれ

それぞれの部署で準備に掛かりました。

午後五時、船橋の当直将校が信号長（比嘉先任下士官）に出港を命令、出港用意のラッパと共に配置に付く。出港の合図と共に「軸先もやいデッコー（外すこと）」「拔錨」「錨巻け」「錨納め」「機関前進」次から次へと号令が飛び交い、「黒島」は鎮海湾を後に一路牧の島へと向かったのです。

道中、戦闘準備の第一配備で運航、午後八時、仮泊錨地へ到着しました。他の艦艇は既に到着しており指揮艇「黒島」の到着を待っていました。

午後十時、宮本司令より飛電があり、「本官明朝五時」「三曳」（哨戒艇、一五〇トン、艇長森誠一郎海軍中尉）にて鎮海出港、八時、牧の島（釜山港を出たところにある島）沖にて「黒島」乗艇予定」。平塚暗号長電報持って突っ走る。小野艇長は電文を受け「信号長は各艦艇へ明朝七時出動を伝達せよ」と命令。

全員明日に備えよ。当直以外は休めと号令。八月六日六時、総員起床、朝礼、本日よりの作戦行動の説明があり、司令艇ともなると敵の集中攻撃的となるこ

とは必定。「各員奮励努力せよ。全員の命は小野大尉がもらった。共に死のう！」と訓示。

「七時全艦艇出動命令伝達せよ」。六時五十分「出港用意配置につけ」。私と他二名は艦橋上部の見張りに付く。七時揚錨、「黒島」を先頭に隊伍を組み一路牧の島沖へと向かったのです。

七時二十分、「三曳」の艇影を確認、艦橋へ報告しました。と同時に五島方向に機影を発見、敵機飛来報告（編隊飛行するような友軍機はいない現状でした）、見張り続けよ！「先頭配置に付け」戦闘ラッパが鳴り響く。私と宮川兵長は艦橋上部の一番機銃配置だったので、機銃指揮に当たりながら見張りを続けました。まもなく機影が、はっきり分かるようになってきた。B29が三十機だ。双眼鏡から目を離さず見張る。「敵機雷投下」。その旨報告、投下位置、個数の確認を命ぜられる。投下個数、十有個を認める。しばらくすると麗水方向へ機影が見えなくなりました。

司令の乗った「三曳」の船影も肉眼で認められるまで近付いていました。その時です。先刻消えた敵機が

反転したのか、きらきらと光るものを認めた。「敵機反転来襲す」と報告、見張りを交代、機銃指揮の配置に付く。

射手は宮川兵長（砲術学校出身）です。他に二名計四名が一番機銃担当です。この「黒島」の対空戦闘装備は①八センチ主砲一門、②艦橋上に二五ミリ連装機銃一、③艦橋後部八ミリ機銃一、④電信室上部二五ミリ連装機銃一、⑤後部甲板二五ミリ連装機銃一であります。

「さあ来い」と待ち構える。時は昭和二十年八月六日午前七時二十五分。敵機影が肉眼で認められる所まで近付いてきた。敵機は、司令艇「三曳」方向で二手に分かれる様子だ。一隊は「三曳」方向で二手に。もう一隊は、こちらに突っ込んでくる態勢だ。戦闘開始。

「撃ち方始め」の号令。八ミリ主砲が鳴り響く。機銃はまだ届かない。敵機が編隊を解き二、三機ずつに分かれ攻撃態勢で各艦を目指しつつあり。

間もなく各艦の機銃が、これを迎え撃って唸り出し

た。「黒島」にも三機が突っ込んでくる様子。別の二機が後部方向に回ったようだ。次々と突っ込んでくる。敵味方の機銃弾が飛び交う。爆弾が近くに落下する。前後左右に急降下、彼我の機銃の乱交射、爆弾投下、艇の震動甚だしい。弾幕は太陽を覆い、砲声は耳をつんざく。至近弾で艇も裂けんばかりでした。

しかし残念ながら、敵機の落下の姿は見えない。宮川兵長へ撃ち方を指示したが、一発も発砲する気配なく敵影を見つめている。その時でした。艇の左前方から突っ込んでくる敵機あり、艦首がその方へと向きつつあり、機影が平行になった瞬間、宮川兵長の手が動いた。撃った。曳光弾が二発敵機へ吸いこまれていった。「当たった」我を忘れて叫んだ。黒煙が吹き出した。尾を引きながら落ちてゆく。「やった！万歳！」と叫んだ。戦闘はなおも続くが敵も警戒したのか攻撃の手が控えられてきた感じがした。さては我が方に優秀な射撃手がいるのを警戒したか。

しばらくすると、敵機も燃料の関係か三々五々遠のきました。ふと我に返り時計を見る。悪夢の三十分間

だった。一息つき無事の有無を確認する。戦死、負傷者一人もなし、幸いにも艇も航行に異状なし。ふと司令が乗ってきた「三曳」の方向を見る。海防艦が見えるが「三曳」の姿がない。「やられた」一瞬戦慄が走った。虚しさがこみ上げた。冥福を祈ってしまった。

「三曳」のみ沈没。

戦闘が夢のごとく去り全艦艇集結、次の作戦行動命令を待つ間もなく、終戦の日を迎えました。海防艦の甲板に我々が撃墜した敵機の残骸と思われる車輪が一つ収容されていました。

当作戦時、見張長並びに一番機銃（艦橋上二五ミリ連装機銃）指揮官、海軍一等兵曹酒井敏郎。

「三曳」は司令を乗せたまま敵機にやられ沈没した。生存者の有無は不明のままです。実際に戦闘に参加した者の戦闘の結果は自分の乗艦は分かるけれど他の艦や全般の情報は不明です。この作戦の結果は、どのようにならぬか上級司令部に報告されたのかも全く不明です。

撃ち落とされた敵機の乗員の生死が私にとって気掛かりなのでした。五十年を経た今日、作戦の様子を発表

する気持ちになったのも歳月が気掛りを薄めたのだと思います。私たちが戦争で生き残れたのも偶然の積み重ねがあったからでしょう。私ももし司令が予定どおり「黒島」に乗っていたら「三曳」と同様の運命に遭い現在生きていないでしょう。

私は終戦後佐世保で下艇し、十二月十五日、三菱に復職しました。

戦いに生死の区別はつけがたきものであるが、幾多の対潜、対空戦に遭遇しましたが、本作戦は司令艇として司令旗掲げ指揮を取る作戦であれば敵の目標になるのは必定でした。宮本司令が乗艇の遅れで我ら「黒島」乗組員の運命が左右されたことを思い、「三曳」に乗船した全英霊に謝心を寄せ、安らかなる冥福を祈ります。

終わりに私のアルバムに記されていた私の好きな歌詞を記します（誰が歌っていたのか不明です）。

敗戦の 悲哀と共に

夢去りて 大海原の友の訣別